近代日中欧言語文化接触に関わる一つの現象
—19世紀中国における英語学習—

内田　慶市

0．はじめに

近代中国におけるヨーロッパ人宣教師をその主な担い手とする「西学東漸」によってもたらされたヨーロッパの近代科学・文化は、実際の事物以外に、多くは彼の国の言語を通して受容された。そして、彼の国の言語を代表するものは、当初はラテン語であったが、徐々に英語が主流となってくる。とりわけ19世紀初めのモリソン来華以降は、中国でのキリスト教布教が、プロテスタント宣教師がそれまでのカソリック宣教師に取って代わる時代であり、またアヘン戦争によって開国した中国の通商貿易の相手国はイギリスを筆頭とした英語圏の国々であったことから必然的に「英語」が最重要視されることになるのである。[1] こうした時代的背景とプロテスタント布教の地理的な流れを承けて、中国における英語学習は19世紀以降に香港、広東から開始される。ここでは、この時代の代表的な英語学習書の流れと、それに付随する諸問題も併せて論じていくこととする。

1．『華英通用雑話(Chinese and English Vocabulary)上巻』(Canton, 1843?)

本書の著者はロバート・トーム（Thom, Robert. 羅伯聃, 1807-1846)であり、他でもなく漢訳イソップ『意拾喩言』(1840) を著したその人である。本書が

作られた目的について序文によれば、おおよそ次の通りである。

つまり、開国以来、通商貿易は盛んになったが、中国人の間で英語に通暁した人は少なく、物的、感情面の両面においてその交流に不都合が生じている。それを打開するために、その手引き書として本書を作ったというのである。

英語の発音は漢字で表記され、「切」あるいは「合」という名称で呼ばれる「反切」を利用した体系的、科学的な方法が採られている。

たとえば、「切」とは「其用法、將首字之頭韻、次字之尾韻二字、切成一聲、與漢文滿文無異」とあって、次のようになる。

因＝N（因字即英文Ｎｎ字相同）

乃因→nine

囘因→when

兒＝R（兒字常用做切、漢和全無是音、即英文Ｒｒ字相同）

弗兒→for

囘兒→where

由＝you, ew（由字即英文之you, ew字也）

非由→few

また、「合」とは「其用法、以首次字、均撮其頭韻、緊些合念做一聲、不可以二聲間斷、此等讀法清文啓蒙一書、極其詳明、學者務宜考究」とあり、次のようになる。

及＝K, C（及字在字尾常用之者、此乃英文之K, C, k, c字也）

薄及→book

密及→make

士＝S（士字在字尾常用之者、此乃英文之S, s字也）

阿士→as

葉士→yes

体裁は、序、「英文字頭分類総目」（アルファベットの読み）、凡例、本文からなり、本文はさらに、「生意數目門」という語彙集（文やフレーズも含ま

れる）と、「日常口頭語」という会話集（単語やフレーズも含む）からなっている。また、その会話文の一部は実は、高静亭の『正音撮要』(1834)の「見面常談」（巻１／中／21-24葉）から取られている。

使用されている中国語は「南方語」的な要素も含まれてはいるが、基本的には「官話」と見なしてよいであろう。ただし、「音」に関しては「南方音」と考えられる。また、英語については全く標準的な英語となっている。

本書はまた江戸末に日本にももたらされ、『漢英通用雑話』（青井堂、萬延元年＝1860)として翻刻されている。

2．『華英通語』(1855)

福澤諭吉の最初の出版物で知られる『増訂華英通語』（萬延元年=1860)と、それに関わる各種版本については、これまでに筆者は以下の４種を見ている。

(1)　『増訂華英通語』萬延庚申(1860)　快堂藏板

福澤諭吉による凡例(２葉)、何紫庭の序(２葉)、目録(半葉)、作者凡例(半葉)、字種(半葉)、本文(99葉)

目録(46類)は以下の通り。

天文類(30)、地理類(45)、人倫類(65)、職分類(32)、國寶類(23)、五金類(27)、玉石類(14)、數目類(35)、時節類(76)、刑法類(59)、紬緞類(45)、布疋類(16)、首飾類(64)、顔色類(46)、瓜菜類(48)、藥材類(17)、疾病類(32)、茶葉類(30)、通商類(142)、食物類(62)、酒名類(32)、飛禽類(39)、走獸類(40)、魚蝦類(33)、器用類(223)、房屋類(120)、百工類(80)、菓子類(45)、身體類(64)、草木類(17)、各埠類(32)、船隻類(46)、炮製類(32)、寫字・房什物類(17)、粧扮類(16)、房内・用物類(17)、単字類(240)、二字類(292)、三字類(57)、四字類(19)、五字類(30)、六字類(40)、七字類

(71)、長句類(59)、單式類(4)（ただし、目録と実際の並びで、「職分類」と「人倫類」は入れ替わっており、また、本文中の各項目の見出しが、「通商類」が「通商貨類」に、「房屋類」が「房室類」に、「百工類」が「工匠類」に、「各埠類」が「各埠名類」に、「寫字・房什物類」が「写房物類」に、「房内・用物類」が「房物類」にそれぞれ変えられている。なお、それぞれの項目に付けた数字は語彙およびフレーズ、センテンスの数である。）

(2) 東北大学図書館狩野文庫蔵『華英通語』
咸豐乙卯(1855) 協徳堂藏板　上下二巻
何紫庭の序文(２葉)、目録(半葉)、凡例（半葉）、字種(１葉)、本文(164葉)

目録（45類）は次の通り。
天文類、地理類、職分類、國寶類、五金類、玉石類、數目類、時節類、刑法類、紬緞類、布疋類、首飾類、顏色類、瓜菜類、藥材類、疾病類、茶葉類、通商類、食物類、酒名類、飛禽類、走獸類、魚蝦類、器用類、房屋類、百工類、菓子類、身體類、草木類、各埠類、船隻類、炮製類、寫字・房什物類、粧扮類、房内・用物類、単字類、二字類、三字類、四字類、五字類、六字類、七字類、長句類、單式類（本文では地理類と國寶類の間に「人倫類」が入っている。従って実際は46類ということになる）

その出版年からして、恐らくはこれが原書か、あるいはそれに最も近いものと言うことが出来るであろう。なお、若干の出入りはあるが、収められている語彙は『増訂華英通語』にほぼ同じである。

この『華英通語』ならびに福澤の『増訂華英通語』には、それぞれ咸豐乙卯の何紫庭の序文が付されているが、そこで編者が「吾友　子卿」として次のように登場する。

蓋聞之無文不可行遠也、惟言語不相通者亦然、我朝柔遠有道、外國商旅梯航來者、絡繹輻輳、第土音各區於方隅、故意氣每難於投契、古者重譯有官職、是故也、吾友子卿從學於英人書塾者、歷有年所、凡英邦文字、久深切究、恆慮華言英語不異北轅南轅、爰將日用應酬事款、別類分門、輯成一帙、名日華英通語、以公同好、庶幾閱是書者、開卷燎然、既熟究卷中之聲韻、復推類以盡其餘、將見應答如流、絶無齟齬之苦、言談相入、幾忘兩地之人、誠堪爲習語者之津梁也夫。

この何紫庭、および「子卿」については未詳である。ただ、本書に採られている語彙や文には「広東方言」のものが多く見られることから、恐らくは香港人あるいは広東人であると思われる。「協德堂」がどのような版元かはよくわからないが、後述のハーバード大学燕京図書館蔵本『華英通語』(1860)も香港の「西營盤」で出版されていること、また、同治12年(1874)に王韜によって香港で創刊された『循環日報』にしばしば掲載された「中華印務總局内文裕堂」の「幼童初學各樣書籍發售」という広告にも「華英通語」という書名が挙がっていることからも『華英通語』は香港周辺で出版されたと考えられる。

(3) ハーバード大学燕京図書館蔵『華英通語』

咸豐庚申(1860)重訂　西營盤恆茂藏板　上下二卷

拙山人の序文(2葉)、目録(半葉)、凡例(半葉)、字種(1葉)、本文(178葉)

目録(41類)は次の通り。

數目類、時節類、天文類、地理類、房屋類、器用類、首飾類、房物類、寫字・房什物類、工器類、職份類、人倫類、百工類、國寶類、五金類、玉石類、茶葉類、紬緞・布疋類、藥材類、通商類、疾病類、身體類、刑法類、顏色類、瓜菜類、菓子類、草木類、食物類、炮製類、飛禽類、走獸類、魚蝦類、酒名類、各埠類、船隻類、単字類、二字類、三字類、四字類、長句

類、單式類

これは、福澤による『増訂華英通語』と同じ時期に出版されているが、その目録は(2)の東北大学図書館蔵本や福澤の和刻本とは大きな異同がある。つまり、「紬緞類」と「布疋類」が「紬緞・布疋類」として一つの項目になり、「粧扮類」がなく、「五字類」「六字類」「七字類」、「長句類」が併せて「長句類」とまとめられている点である。

また、本書の序文は「何紫庭」ではなく、「拙山人」となり、その序文に登場する本書の原著者とされる友人は「子卿」ではなく以下のように「子芳」となっているのが大きな特徴である。序文の語句も東北大学蔵本『華英通語』や『増訂華英通語』とは少し異なっている。

余友子芳自少肄業於英人書塾、至今歴年久矣、凡英國言語文字靡不留心考究、及披閲前輩所刻華英通語一書、別類分門亦已有條不紊、然類中所刻不無遺漏之處、貿易家每惜其有所未備、而且唐音不正、故特此逐類參訂、將日用應酬事款間有未備者、補其闕略、無關事務者、稍爲删除、訂正語音、庶幾覽是書者、聲韻雖別、以華英而應答、無處其齟齬未昭然、習語者方便之門也、是爲序。

咸豐庚申清明節後養　　拙山人謹誌

この序文によれば、「子芳」が先人の著した『華英通語』を改訂したとなっているが、「子芳」と「子卿」が別人か同一人物かは今のところわからない。

(4) エール大学図書館蔵『華英通語集全』

光緒己卯(1879)重訂　藏文堂印

序文なし、目録(半葉)、凡例(半葉)、字種(1葉)、本文(92葉)

本文は問答類（稱呼、問話）から始まり、その後、目録順に並ぶ。ただし、刑法類までで、以下（おそらく下巻）は未見。

目録(41類)は以下の通り。

數目類、時節類、天文類、地理類、房屋類、器用類、首飾類、房物類、寫字・房什物類、工器類、職份類、人倫類、百工類、國寶類、五金類、玉石類、茶葉類、紬緞・布疋類、藥材類、通商類、疾病類、身體類、刑法類、顔色類、瓜菜類、菓子類、草木類、食物類、炮製類、飛禽類、走獸類、魚蝦類、酒名類、各埠類、船隻類、単字類、二字類、三字類、四字類、長句類、單式類

この本の項目は(3)とほぼ同じであり、ハーバード大学蔵版の重訂ということになる。

いずれにせよ、各種版本についての詳細な報告は別の機会に論ずることとして、収められた語彙等についても少し触れておくと、先にも述べたが、基本的には広東方言である。「孖」「佬」「佢」「乜」といった広東語特有の語が見られるし、修飾構造も「鷄公」「鷄母」「猪公」のように「被修飾語＋修飾語」となっている。これは、ロブシャイドの辞書とも共通する点であるが、メドハーストの辞書との比較において明らかに差があるようである。別の見方をすればメドハーストの辞書は意識的に広東方言を避けようとしたことが言えるのかも知れない。

また、この『華英通語』における「英語」と「中国語」の関係も興味深い点がある。つまり、「英語」が先か、「中国語」が先にあったかの問題である。

たとえば、「食物類」に見られる「dried grape－葡萄干」である。この英語はいかにも「直訳的」な感じがしてならない。英語では「干しぶどう」は普通は「raisin」と言うのではないか。「時節類」における十二支の対訳も奇妙である。

子－a rut	丑－a cow	寅－a tiger	卯－a rabbit
辰－a dragon	巳－a snake	午－a horse	未－a sheep
申－a monkey	酉－a cock	戌－a dog	亥－a boar

もし「英語」から「中国語」であったならば、「dog」の訳語に「戌」を当てるであろうか。「horse」は「午」よりは「馬」が自然であり、他の場合も同様である。

すなわち、『華英通語』はその書名の通り「華」から「英」であったと考えるのが妥当なように思えるのである。

2－1　「文裕堂」に関わること

ここで、先にも少し触れたが、『循環日報』の広告に見える「中華印務總局内文裕堂」について少し詳しく取りあげておく。

『循環日報』は王韜によって、同治12年12月4日＝1874年2月4日に香港で創刊された華字日刊紙であるが、その前身は「中華印務總局」という。そして、その創刊号よりしばしば次のような「幼童初學各樣書籍發售」という広告が掲載されている（創刊号のものには、それぞれの書籍の値段も書き加えられているし、薬の宣伝も混じっている）。

幼童初學各樣書籍發售

法士卜、昔近卜、撻卜、科卜、糠乎卜、列丁卜、女仔書、士啤聆卜、信札書、曲忌信書、德怠干威宜、小卡藍麻、又大卡藍麻、湛孖士卡藍麻、蘇埋分卡藍麻、書館常用卡藍麻、花旗卡藍麻、類字辨似書、英文字典、初學寫字簿、石版、石筆〇又有番文譯成唐文書籍、談天、代微積拾級、重學淺説、西醫略論、重學、大英國志、化學初階、西藥略釋、西醫新法、格物入門、地理問答、十八省地理圖、植物學、博物新編、西國學校、伊娑菩喻言、通商税則、中外和約、汽機發軔、汽機必以、汽機必以附卷、算學啟蒙、化學分原、化學鑑原、製火藥法、運規約指、地球説略、普法戰記〇唐番字書、英粤字典、英語集全、華英通語、智環啟蒙、集話書法士卜、北方地理志、唐番譯番分、道德經、四書、四書白文、

曾文公榮哀錄
同治十三年 六月初五日 中華印務總局内文裕堂啟

ここで挙げられている書籍は、まさにこの時代を代表する「啓蒙書」というべきものであり、江戸期の『横濱繁昌記』（錦溪老人＝柳川春三と考えられる）に見える「舶來書籍」と重なり合うものが多いことも注目される点である。

さて、この中の英語学習書として『智環啓蒙』『四書白文』（いずれもレッグにより初めは英華書院から出版されたもの）などとならんで『華英通語』や後述の『英語集全』も見えている。また、『伊娑菩喩言』も見えているところから、『華英通語』の版元や「文裕堂」の性格がおぼろげながら浮かび上がってくる。

『循環日報』を発行した「中華印務總局」については、同じく創刊号に以下のような文章が載せられている。

中華印務總局告白（同治十二年十二月十八日啟）
謹啟者、本局自開辦印務以來、將經一載、現股於荷李活道門牌第二十九號、即前日新興記絲行舊址、梳沙印字館對門、本局專印活字版各種書籍、無論唐番字樣悉爲代印、現局中所印書籍甚夥、即如吳鄉士紫詮唐文書普法戰記、及羊城傳教牧師湛先生英粤字典、上海出洋局鄺全福先生華英字典、皆在本局印行・・・・・

蘇精1985でも恐らくはこの記述をうけて以下のように述べている。

同治十年（1871）英華書院及教會印刷所因故停辦、其中的印刷器材分爲兩個去處：一部分被總理衙門購去、以備同文館即將開設印刷處之用、而且還是黄勝親自押送京師交訖的；大部分則黄勝、王韜等集資承購、在香港設立一所「中華

印務總局」、從同治十二年初開業、除以活字版排印中英圖書及文件外、兼出售各號鉛字、並籌劃編印日報。他們承印的包括王韜的普法戰記、湛約翰（John Chalmers）的英粵字典、鄺其照的英華字典等、但這年九月之前、黃勝便攜開香港、因此未及參與翌年中華印務總局的改組爲「循環日報」。
（蘇精『清季同文館及其師生』上海印刷廠、1985、263-264p）

卓南生1990でも次のように言う。

『循環日報』の発刊後に、中華印務総局のその他の活動は引き続き行われていた。その営業内容は次の三つであった。

(1) 中華印務総局は引き続き顧客のために中文・英文の書籍、広告、海外新聞、各種の契約・文書などの印刷を行っていた。

(2) 書籍、辞書、洗髪料、強壮剤などの各種の丸薬・飲み薬などの販売

(3) 大、中、小各種類の鉛活字の販売(249-250p)

このような記述から考えると、「文裕堂」とは『循環日報』内に設けられた、卓1990で言われる「中華印務総局」の三つの業務を担当する機関であったと思われる。ただし、同治13年あたりの『循環日報』の「文裕堂」の広告からは「薬」に関する記載は省かれており、徐々に書籍の印刷、販売に特化されていったものと考えられる。

「文裕堂」の名の見える出版物には管見では以下のようなものがある。

『伊娑菩喩言』（1903年４次校鐫）

『智環啓蒙塾課』（1895版）

『華英字典彙集』（譚宴昌譯刊、王韜序=1875、1897年３次重刊）

『俗話傾談』（邵彬儒、1903）

この他に、Cordier1906－1907によれば、以下のようなものが“Man Yu Tong”つまり「文裕堂」から出版されている。

The Tah t'sz(達辞) Anglo-Chinese Dictionary(1897)
『英語必讀』(1899)
Aesop's Fables.(by Alfred J.May, 1899)

最後の「イソップ」はトームの『意拾喩言』の英文を英語学習用の教材として改訂したものであるが、筆者の見たものは“China Mail”の出版物となっており、「中華印務總局」あるいは「文裕堂」は“China Mail”の印刷も請け負っていた可能性もある。

なお、同じくCordierによると、架蔵の『華英字典彙集』は上記のように3次重刊本であるが、初版本(1875)の出版社は“The Office of the Chinese Printing and Publishing Company. Hongkong”（恐らくは「中華印務総局」の英文名）[2] とあるから、この時代には「中華印務總局」と「文裕堂」は並存していたということも言えるかも知れない。

また、「中華印務總局」「文裕堂」は「英華書院」からその印刷設備を引き受けているというところから、それらの出版物との継承関係があると考えるのが自然である。『智環啓蒙』や『伊娑菩喩言』(『意拾喩言』を改称したもの)が最初、英華書院から出版され、その後、「文裕堂」からも出版されたことはその典型であるが、『華英通語』もその初めは英華書院から出版された可能性もある。ハーバード大学蔵本は「西營盤恆茂藏板」とあるが、「西營盤」とはまさに英華書院の置かれていた場所である。

3．『英話註解』(1860)

本書の著者は、張寶楚、憑對山、尹紫芳、鄭久也、姜叙五である。これらの

五人の著者の来歴は未詳であるが、その序によれば、それ以前に『英話』という学習書があったが、広東音で注音がなされており、広東音を知らないものにとっては、つかみどころがなく、そこで上記の五名によって、「勾章（寧波の旧称）」の「鄉音（方言音）」で注音して、タイトルも『英話註解』としたとある。『英話』なる本が如何なるものかはよくわからないが、先の『華英通話』などの広東音を基にした学習書であることは間違いない。

本書の成立は序の刊記などから1860年前後である。

関西大学蔵本は上海掃葉山房書坊版（光緒辛巳=1881）であるが、早稲田大学図書館には守拙軒蔵板（咸豐庚申=1860）が蔵されており、これが恐らくは初版本であろう。

本書の特徴は「寧波音」での注音と、中国語に対応する「けったいな」英語、つまり“Pidgin”英語である。

本書に見える英語の文はほとんどが以下のような規範からはずれたものになっている。

我不看你	I no see you.
你要多少	You want how much.
你添些多少	How much you add.
你幾時走	You go what time.
就曉得的	Have understand.
此東西真好	This thing very good.
這都是舊貨	This all old cargo.
這個絲不好	This silk no good.
不要忘記	No want forget.
你不必等	You no wait.
我不能做主	I no can make law.

不能進域	No can inter city.
別人不曉得	Other man not know.
你要裝頭船	You want stow first ship.
偐必要趕快	Must wang run quick.
如遲趕不著	If late cannot overtake.
這事情不好	This business no good.
我去說再來	I go talk come again.
我與你對帳	I with you settle count.
你該我多少	You owe me how much.
同你說閑話	Along you talk idle words.
總有人擔保	Must have man make security.
小行在某處	Small shop at that place.
都是正經事	All is proper business.
不可管閑事	Don't mind busy-body.
信船沒有到	Letter ship no come.
問你的信息	Ask you answer.
不拘到那裡	No matter where you go.
你近來甚麼好運氣	You just now very good chance.
你從前做甚麼生意	You before to do what business.
我在某處做夥計	I at that place make partner.
你現在要甚麼貨	You just now want cargo.
這叫甚麼名件	What this things called ?
我這樣絲最多	Very much this silk.
倘若朋友不肯賣	If friend no can sell.
今日沒有功夫	Tomorrow no have time.
明日不能過磅	Tomorrow no can make weight.
你甚麼時候來	You what time come here.

3－1　ピジンに関して

実は『華英通用雑話』以前にも英語学習書は出版されている。たとえば、周振鶴1998によって示された『紅毛番話・貿易須知』や、呉義雄2001に挙げられている『紅毛通用番話』などである。そして、これらに登場する英語がまさに、『英話註解』と同様のピジン・イングリッシュなのである。

また、ピジン・イングリッシュや「ジャーゴン」(Jargon＝ピジンの最も単純な形)に関しては、Williams1836, 1837やHunter1882で早くから指摘がある。

Hunter1882では次のように述べられている。

Pegeon-English is the well-known name given to that unique language through the medium of which business was transacted and all intercourse exclusively carried on between the 'Western Ocean' foreigners and Canton Chinese. (60p)

On the other hand, the shrewd Chinaman succeeded in supplying this absent of knowledge of his own language by cleverly making himself familiar with sounds of foreign words, and conforming them to his own monosyllabic mode of expression, at the same time using simple Chinese words to express their meaning. He thus created a language, as it may be called, deprive of syntax, without the logic of speech, and reduced to its most simple elements. It took firm root, became the conventional medium of intercouse in respect to transactions of enormous value and magnitude, and exists in all vigour and quaintness to this day. (61p)

The word 'pigeon' is simply a corruption of 'business', and with its companion means business-English. (61p)

Williams1836で挙げられている「ジャーゴン」の例としては次のようなものがある。

Velly well

Chin-chin, how you do; long time my no hab see you.

I can secure hab long time, before time my no have come this shop.

Hi-ya,so,eh! What thing wantchee ?

Just now no got. Ithink Canton hab got velly few that sutemeet (=sweetmeat).

You have hear that gov'nor hab catchee die ? last day he hab die!

Yes, my hab hear; just now which si your partner have go ? Two time before my com, no hab see he.

(Williams,S.S, Jargon Spoken at Canton, *Chinese Repository*, 1836, Vol. 4.431p)

ここで示したのは、広東を中心とするものであるが、上海にも同じようなピジンが存在していた。いわゆる「露天通事」による「洋涇英語」である。

たとえば、周振鶴、遊汝傑1986によると、以下のような例が挙げられている。

康姆=come

谷=go

也司=yes

雪堂雪堂=sit doqn sit down

撲鐵禿=potato

勃拉茶=brother

發茶=father

賣茶=mother

（周振鶴、遊汝傑編『方言與中國文化』257-258p）

この他にも、「洋涇浜英語」あるいはピジンの例として、

One 温

Two 都

Three 地理

four 科

などがよく言われるし、前述の『循環日報』の「中華印務總局内文裕堂」の書籍広告に見える「法上卜・昔近卜・撻卜・科卜・郎乎卜・列丁卜・土啤聆卜・卡藍麻」も同じものと考えられる(それぞれ、first book, second book, third book, fourth book, fifth book, reading book, spelling book, grammarである)が、ここで少し注意が必要に思われる。果たして、漢字で表記されたこれらの言葉もピジンと呼ぶべきか否かである。

これらを全てピジンと呼ぶとすれば、次のものもピジンとなる。

可口可樂=coca cola

珈琲=coffee

T恤=T shirt

拉司卡=last car

的士=taxi

巴士=bus

卡拉ok=カラオケ

すなわち、外来語の「音訳語」との区別の問題である。「音訳語」がピジンとなれば、日本語のカタカナ語も当然ピジンとなるだろう。

以前、アメリカ滞在中のバスの中で、年老いた中国人が英語を勉強しているのに出くわしたことがあるが、その時、彼女は「Januay」という単語の下に「吉尼奥日」と書き込んでいたのを見たことがある。すなわち、漢字で表記されたこれらは、あくまでも一種の発音表記（音注）と考えるべきではないかというのが筆者の考えである。

また、次の例は日本語を借用して出来た英語のピジンである。

Taksan years ago, skoshi Cinderella-san lived in hoouchie with sisters.
(ずっと昔、小さなシンデレラは、姉妹といっしょに家に住んでいました)
(田中春美他『言語学のすすめ』大修館書店、1978, 161p)

結局、ピジンとは「言語接触」により誕生する、「限られた語彙・音韻」と母国語の文法に影響された、相手方の言語の規範的な文法、構文を単純化したものと考えることができるであろう。

ただ、ピジンにも一定程度の規則性はある。たとえば、先の『英話註解』で見てみれば、「在=at」、「要=want」、「不、沒=no」、「與=with」というような決まった対応関係は見られるし、時制や形態変化はほぼ無視するという「規則性」はあるのである。(3)

中国における英語学習の歴史の中で、初期のものには確かにこのようにピジン現象が多く見られるのであるが、それも『華英通用雑話』以降はあまり見られなくなる。60年代の『英話註解』にそれが多く見られる理由としては、恐らくはその底本であった『英話』なる書物の成立に関わるものであろうと考えられる。『英話』は英語にはそれほど通暁しない中国人によって著され、またその時期も案外40年代以前の可能性も残されているように思われる。

4. 『英語集全』(1862)、『英字入門』(1874)、『英字指南』(1879)

『英話註解』の後に出るものとしては、この3種のものが知られている。

『英語集全』は同治元年(1862)に唐廷樞によって広東の「緯經堂」から出版されたものである。全6冊からなり、漢字による注音の説明も詳細であり、語彙の分類もなされている。語彙、注音は広東語をベースに書かれているが、英

語は標準的なものである。なお、著者の唐廷樞はかつてマカオのモリソン記念学校で学んだ人であり、同級生の黄勝、黄寛、容閎と共に1847年に最初のアメリカ留学をした一人である。

『英字入門』は同治13(1874)年に上海で出版された。著者は曹驤。ただ、筆者は未見である。

『英字指南』は光緒5(1879)年の出版で、著者は上海廣方言館出身の楊勳である。上海音での注音がなされている。なお、本書は1901-2年頃に商務印書館より増訂版が出版されている。

5. 『英文舉隅』(1879)[4]

汪芝房の手になるもので、光緒5年(1879)、同文館集珍板。

曾紀澤の序(光緒4年)3葉、凡例2葉、本文54葉。

アメリカのカール文法を訳出したものであるが、品詞分類は9品詞で「靜字(Noun)」「代靜字(Pronoun)」「區指字(Article)」「繫靜字(Ajective)」「動字(Verb)」「綰合字(Preposition)」「承轉字(Conjunction)」「發語字(Interjection)」と命名する。品詞論のほか、構文、誤用分析、標点符号等についても詳しく述べられている。

これは恐らくは中国人の手になる最も早期の英語文法書と考えられる。

6. 『英語彙腋初集』(1885)

本書は鄺其照の手になるもので、その英文タイトルは以下の通りである。

Kwong's educational series(in English and Chinese)

First conversation-book(Shanghai:Wah Cheung (1885)

著者による1881（光緒7）年のHartford,Conn.,(U.S.A.）での中国語、英語の序文が付けられており、さらに、王韜による光緒10年（1884）の序文も付いている。

７つの章からなり、その内訳は、発音、常用語とそれを使った例文、分類常用語とその例文、様々な例文、英語の特徴等に関する文、身体に関する文、人倫に関する文となっている。総245p。

鄺其照の英語は定評のあるところであり、いわゆる正統的な英語教科書の最初のものと言えるであろう。

7. 商務印書館の英語教科書

商務印書館の成立は1897年であるが、その最初の出版物が以下の２種類の英語教科書であった。

『華英初階』
『華英進階』

いずれも、商務印書館創立の翌年(1898=光緒24年）に出版されたもので、謝洪賚[5] により、イギリス人の編集したインドでの教科書を翻訳し、白話による注釈を施したもの。

この『華英進階』に収められているテキストには以下のように「イソップ」も含まれているが、興味深いのは、その挿絵がその後同じ商務印書館から出た林紓の『伊索寓言』(1903)にも採用されていることである。

初集　童子和硬殼果（21）

二隻雄鶏(27)

熊和蒼蠅(35)

一人和他的鵞(39)

一犬和一牛(46)

弐集　鴉與天鵝(8)

驢和騾(15)

兎與龜(75)

獅與驢(80)

参集　鷹與鴉(2)

獅與牛(14)

騾與馬(21)

愚牡鹿(45)

二人與熊(81)

(　) 内は課を示す。

イソップが英語教材として使われたことは、その内容と英語の平易さからもよく理解できることであり、先にあげたA. J. Mayのものがそうであるし、カソリックの学校であるSt. Francis Xavier's School(Shanghai)の『A method of learning to read, write and speak English for the use of Chinese pupils PartII 英文捷訣』(ZI-KA-WEI, Printed at the catholic mission press, Orphan Asylum of Tou-Se-we. 1883)』にもイソップが収められている。また以下のような記述もある。

西元1864年1月、韋確士(E. J. R. Willcocks)從英國到港任中央書院英文教員、於西元1865年、將英文科變爲必修科、第一班(Class 1)的翻譯科、要求學生將伊索寓言及孟子翻譯爲英文。

(方美賢『香港早期教育發展史』26p　中國學社 民國64年3月)

この『華英初階』『華英進階』以降、中国における英語学習書は、この商務印書館を中心に陸続と出版されることになる[6]。また、『英文雑誌』(1925-1927)、『英語週刊』(1915-1937) といった「英語学習雑誌」も創刊されている。

8. おわりに

以上、19世紀の中国における英語学習書についてながめてきたが、この他、「英華字典」の類も最初は宣教師の手によって多く編集され、商務印書館成立以降は、これも商務印書館を中心として出版されてきている。

いわゆる「中国における英語学習史」あるいは「中国における英語学史」の研究はこれまで余り行われてきてはいないが、実は、言語接触の研究、日中語彙交流史、中国語学史の研究にとっても極めて重要な課題である。

また、上述のように『華英通用雑話』(1843) が幕末には日本に舶来されて『漢英通用雑話』として翻刻されており、その時期が福澤諭吉の『増訂華英通話』と同時期 (1860) であることも興味深いことである。この1860年というのは、日本の英語学習史においては、極めて重要な年である。日本での公式の英語学習は1808年8月15日のフェートン号事件を契機に始まり、「蘭学」から「英学」という大きな転換期を迎えるのであるが、本格的な英語教科書はその頃まだ存在しなかった。その後、1860年にジェームス・レッグ (James Legge) の『智環啓蒙』がフルベック (G. H. F. Verbeck) によって長崎に輸入され英語の教科書として迎えられたという事実がある。[7] いずれも、まずその教材を中国に求めたということになる。さらには、これも先に触れたが、幕末・明治期に西洋知識の導入に大いに活躍した柳川春三の『横濱繁昌記』の「舶来書籍」に挙げられた書籍類[8]と、『循環日報』の「文裕堂」広告に見られる「啓蒙書」の見事な一致性などを考えると、「日本における英学史」の研究、そして日中文化交流史の問題としても、今後、さらにこの分野の研究に目が向けられるべきであると思われる。

【注】

- たとえば、鄭其照の『字典集成』(Hongkong, The Chinese Printing and Publishing Company, 光緒元年=1875)の序文では次のように言う。
自中外通商以來・各處港口貿易日廣・凡貿易必通洋文・而洋文以英文爲正
ただし、カソリックの場合は英語以外の言語の教育に主眼を置いていたようである。それは、『中華公教圖書目録 (General Catalogue of Chinese Catholic Books) 』(香港、1941)などに見える語学書で、英語に関するものが少なく、ラテン語、フランス語など他の言語のものが圧倒的に多いところからもうかがえる。
- 注1で示した鄭其照の『字典集成』も同じ出版社名であるが、これは、「中華印務總局告白」や蘇精1985で触れられている英華字典である。

(3) ピジンが一種の定着をみると「クレオール」という形で保存される場合もありうる。たとえば、「琉球官話」と呼ばれるものがある。これは琉球で学ばれた特に福建との交流に用いられる「中国語」であるが、その中身をよく眺めてみると、確かに福建語、あるいは閩南語的な要素は含まれてはいるのであるが、しかしながら、むしろそれは限られており、むしろ「どこでも」「誰でも」通じる南北混在の「官話」の性格を多く備えたものである感触を持っている。また、現在の中国語における「普通話」も同じようなものであり、実際に話される言葉は、その土地の言葉であって、「普通話」というのは一種の「規範」に過ぎないものであると考えられる。「規範」は社会的約束のようなものであり、ラングとパロールの関係で言えば「ラング」的なものであろう。別の言い方をすれば、実際はどこにもそれは存在しないが、意識の中で存在するもの、あるいは「クレオール化」したものと言ってもいいのではないかと考えている。

(4) 書名にある「舉隅」とは、「一隅之舉」ということで、「1つの例文を示して、その具体的な用法を説明する」というような意味。(一舉一反 三一一隅を知って他の三隅を知る)

(5) 謝洪賚(1872-1916)

浙江省紹興人、父親の元芳は長老会の牧師、11歳の時に蘇州博習書院(後の東吳大学)に入学、1892年(光緒18))に卒業、その時にAlvin Pierson Parkerに認められて彼ら夫婦の通訳となる。その後、1895年にParkerが上海の中西書院の

院長になった時に、彼に伴って中西書院の図書管理員となり、翌年、教授となる。1903年10月には商務印書館の株主となっている。（汪家熔1988, 80p）
商務印書館の『華英音韻字典集成』も彼の編になるものである。

(6) 1897－1949年の間の英語教科書の出版数は合計128点（30点からなる「英語文庫」と20点からなる「惜陰英文選刻」はそれぞれ１点と数えた）に上るが、この中には『華英智環啓蒙（中西文合璧教科書）』なども含まれている。

(7) 『智環啓蒙』に関しては、拙著『近代啓蒙の足跡－東西文化交流と言語接触：『智環啓蒙』の研究』（沈国威との共著、関西大学出版部、近刊）に詳しい。

(8) 『横濱繁昌記』（成書年代不詳）の「舶来書籍」の一章の全文は次の通りである。

舶來書籍

西洋書籍、量天測地、講武修文、百工技藝之書、舶來最夥。非洋學先生、則不能得而讀也。近今英米二國、務修漢學。在香港上海等處所刊漢字著書頗多、亦是知全世界之繁昌矣。如莫利宋、林則徐所著、則不更論。新出書目、推步則談天、數學啟蒙、代數學、代微積拾級、幾何原本。格物則博物新編、重學淺說、格物窮理問答、智環啟蒙。刀圭則全體新論、内科新說、西醫略論、婦嬰新說。廣輿史乘則瀛寰志略、地理全志、地球說略、萬國綱鑑錄、大英國志、聯邦志略。新報紀事之屬則遐邇貫珍、六合叢談、中外新報、上海新聞等。老人多未目擊之、姑錄其目、以備石客參考耳。

また、ここで挙げられている書籍の多くは、文久２年（1862）の高技無作等の上海行の際に購入したものにも含まれるものである。（内田2002, 108－109p参照）

なお、フルベックが当時中国に求めた書籍のリストは、武藤長蔵1919－20のGeroge Smithの記述からの引用によれば、以下の通りであるが、これも『横濱繁昌記』や文裕堂の広告のものと重なっている。

"Herschel's Astronomy" in three volumes by Mr. Wylie of Shanghae. 50 copies.

"The Christian Almanack" for 1860, the former half containing an abstract of Christian doctorine with general history.

"Circle of Knowledge", a schoolbook in Chinese and English, by Dr. Legge. Hongkong. 20 copies.

"History of England" by Mr. Muirhead of Shanghae. 2 copies.

"A Japanese-English Vocabulary" by Mr. Liggins. Price 3 itzebus. 147 copies.

"A Chinese Miscellany" published monthly by the missionaries at Shanghae.

"The Ningpo Serial" by Dr. Macgowan.

この中の "Herschel's Astronomy" は『談天』であり、"Circle of Knowledge" は『智環啓蒙』、"History of England" は『大英國志』である。

【参考文献】

S. S. Williams 1836 Jargon Spoken at Canton. *Chinese Repository*, Vol. 4.

---------- 1837 Chinese Vocabularies. *Chinese Repository*, Vol. 6

W. C. Hunter 1882 *The 'Fan Kwae' at Canton before Treaty days. 1825-1844*, Paris

Cordier 1906-1907 *Bibliotheca Sinica* Vol. III Paris.

武藤長蔵 1919－20 「再ビ銀行ナル名辭ノ由來ニ就テ」『國民經濟雜誌』第26巻第6号、第27巻1，2，4，6号、第28巻第1号

Catholic Truth Society 1941『中華公教圖書目録 (General Catalogue of Chinese Catholic Books)』香港

方美賢 1975『香港早期教育發展史』中國學社

商務印書館 1981 『商務印書館圖書目録 1897-1949』商務印書館

魯言 1984 『香港掌故第二集』廣角鏡出版社

1985 『基督教早期在華傳教史』臺灣商務印書館

李志剛1992　『香港教會掌故』三聯書店
周振鶴・遊汝傑1986　『方言與中國文化』上海人民出版社
商務印書館1987　『商務印書館大事記』商務印書館
汪家熔1988　「記《華英初階》注譯者謝洪賚先生」『出版史料』1988. 3-4
卓南生1990　『中国近代新聞成立史 1815-1974』べりかん社
呉義雄2001　"広州英語"與19世紀中葉以前的中西交往　『近代史研究３』総第123期
内田慶市2001　『近代における東西言語文化接触の研究』関西大学出版部
沈国威・内田慶市2002　『近代啓蒙の足跡－東西文化交流と言語接触：『智環啓蒙』の研究』関西大学出版部